こだま新聞

第184号
平成23年2月

平成22年度学校保健報

文科省より、平成22年度学校保健統計調査速報が発表されました。今回通知されたのは全国平均ですから、秋田県の地区別の数値発表はもう少し後になりそうです。

虫歯の発生状態を年齢別に見ると次の図のようになっていました。

年齢	平成21年度	平成22年度
5歳	46.5%	46.1%
6歳	56.2%	53.9%
7歳	62.8%	61.2%
8歳	68.2%	65.6%
9歳	68.4%	66.0%
10歳	61.7%	60.0%
11歳	53.5%	51.1%
12歳	49.7%	47.5%
13歳	52.2%	49.7%
14歳	56.6%	54.6%
15歳	58.0%	55.6%
16歳	62.3%	60.3%
17歳	66.5%	64.3%

この票は虫歯を持つ人の割合を示したものです。虫歯があって治療が終了している人も含まれています。全体的には平成22年度よりは改善しているようです。ただし、虫歯のまったくない人の割合が半数以上いる年齢は5歳児、12歳児だけです。先進国の中ではまだまだ虫歯の予防意識が国全体でも低いように思います。

新聞報道では能代市や秋田市が来年度からフッ素洗口に取り組むと書かれてありました。平成23年度は、歯科医、歯科衛生士、学校保健、保護者がそれぞれの立場で連携し、虫歯予防への活動がますます進む時期になってほしいと思います。

心肺蘇生、新たな取組

国際蘇生連絡委員会は平成22年10月18日に「心肺蘇生と緊急心血管治療のための科学と治療の推奨にかかわる国際コンセンサス2010」を発表しました。それによると人工呼吸よりも胸骨圧迫による心肺蘇生の重要性が強調されています。その要点を見ると、

「反応がなく呼吸をしていない、又は死戦期呼吸のある成人の傷病者に対して、一般救助者は脈拍を評価せずただちに心肺蘇生を始めるべきである」（注・死戦期呼吸＝子供が激しく泣いたあとにみられるしゃくりあげるような不規則な音だそうです）

「心停止と判断した後、救助者は気道確保や人工呼吸よりもまず胸骨圧迫から心肺蘇生を始める」・・・。

つまり、人工呼吸よりも胸部を圧迫する心肺蘇生を優先してやりなさいということのようです。回数は一分間に百回程度だそうですから約1秒に2回弱圧迫することになります。今月中に最終的な新ガイドラインがお目見えするようです。

新刊紹介

「忘れ得ぬ人々」
著者　菅禮子（五城目町）

平成22年11月6日発行

副題は「原点25年編集長の回想」とあるように昭和25年にヒューマンクラブの編集長となって25年間活動した結晶です。その間に出会った30名の個性的な人々と小畑勇二郎氏を始めとする11名の首長へのインビュー記事が掲載されています。ある意味で秋田の昭和から平成までの歴史を物語った本とも言えそうです。

昭和4年に東京で生まれましたが父の転勤で朝鮮京城に移住し、京城女子師範学校を卒業。終戦の騒乱の中父の実家である五城目町馬場目中村に引揚げました。秋田師範学校本科に転入し、昭和23年に卒業し最初に教師として赴任したのが馬場目小学校でした。

昭和17年に最年少（14歳）で明治神宮献詠歌入賞するなど文才に秀でていた著者は昭和46年旺文社全国学芸コンクール社会人小説部門で全国1位を受賞し、執筆活動を本格化しました。

今月の行事

2月の行事

4日　休診
4日　信金合同新年会
5日　町合同厄払還暦祭
5日　大潟村国際料理交流会
10日　潟上南秋学校保健会
11日　建国記念日　休診
15日　休診
19日20日オフィス玉手箱公演
20日　町ボランティア大会
21日　乳児健診・BCG
24日　3歳児健診
26日　医療崩壊の深層と再生
会場　秋田総合保険センター

編集印刷　児玉医院歯科　児玉亮　秋田県南秋田郡八郎潟町一日市115-1　電話875-2092　mail:kodama54@rnac.ne.jp